

として、一般中小企業概念では解消しきれない幅と矛盾を有している。現在、地域には、西陣織の業者約1500の営業所や工場、約4000の賃機業、約1000の関連業が集積しているが、その流行性の強い多品種少量の西陣織製品の多様性をそのまま反映して、産業・地域構造はきわめて複雑である。同じ西陣内に、近代化の極度に遅れた5人以下の家族労働者からなる零細企業から高度経済成長に即応して規模拡大をしてきた100人以上の大企業まであり、高級品も大衆品も織られ、着尺・帯の固有部門だけでなくネクタイ、室内装飾織物などの新興部門も多く織られている。それ故部門別、規模別で各々立地現状、改善要求もかなり異なる。複雑さの原因としては、本地域の伝統産業地域としての特性一例えば“産業”の方向が合理性、生産性、経営主体の概念をもつのに対し、伝統の面では逆に「過去」「伝承的な要素」がつきまとうといった、常に2つの要素の背反性の中に地域が在ることや、衣料消費の側の動機あるいは文化的諸条件がからまって、単に規模が零細であるから製品の価値が低いとは限らないという資本集中・経済効率の論理のみではない別の価値意識が地域に働いていることを見逃せない。そのため、ほとんどの企業は資本蓄積がされにくい面を持ち、多額の固定資本を投下して工場を建設するよりも、製品の性質上や経営の安全の上から丹後などの農村への出機拡大という方式によって生産を拡大してきているのが現状である。又、西陣の立地基盤自体に目を向ければ、商・工・住混合の伝統的都市空間を形成している独自の地域構造を有するが、小規模企業密集地帯として立地条件そのものが悪化しており、それが出機を促す原因・地区内労働力確保困難化の原因ともなっている。すでに大企業は自力で郊外への工場移転をすすめているが、最近みられたネクタイ工業団地建設と、西陣地区特別工業地区指定は、前者は共同化による体質改善と郊外への拡大、後者は地区内環境整備第一歩として新しい方向を示している。日本の経済構造及び人々の価値観の大きな転換の中で、この様な伝統産業地域の今後の進むべき方向には注目すべきものがある。

埼玉県朝霞市における都市化と農業の変化

長谷川 聡 子

この地域においては、34・35年ごろより「東京のベッドタウン」として宅地化が進みつつある。工業化に関しては、やはりそのころより中小企業の工場数の急増がみられるが、大工場は少ない。又、この地域は古くよりニンジンなどの根菜類に適する良好な土壌をもち「東京の近郊農業地域」として知られていたが、宅地化現象が顕著となった34・35年ごろより農地転用も増大し、耕地の減少が著しくなっている。さらに、貸し家・アパート兼業を行なう農家、都市への勤めや農閑期の日雇いなどに出る農家が増大し、40年ごろまでは他地域と比べても高かった専業農家率が低下し、近郊農業の性格を変容させつつある。

朝霞の農家戸数は全市戸数のわずかに36%（昭45）にすぎず、地域の産業の中でもその地位を低下させつつある。しかし、そのような地域においても、まだ多くの土地を所有しているのは農家である。したがって、地域の変貌一都市化現象を見てゆく際にも、農地を提供してきた（しつつある）農家の役割には大きなものがあると思う。さらに、この地域は、自営兼業農家率が高く、兼業の形として貸し家・アパート・貸工場などを営む農家が多いと考えられる。したがって、“土地”に関して農

業の変化と都市化現象には深い関係があるだろうと考えられる。

たとえば、根岸・台、浜崎・宮戸のような畑作地域で経営耕地規模も小さくなく、比較的精力的に野菜栽培を行ってきた地域においては、多毛作の野菜作りを継続させるため労働力が他の仕事に奪われる事のない貸し家、アパート兼業が多く見られた。そしてその転業資金を得るためにも耕地の売買が進み、宅地化現象が顕著にみられる。農業にとっては耕地の減少・市街化にともなう新たなマイナスの条件が生まれつつある。

それに対して、稲作地域で中規模の耕地をもち、冬は、よしず・竹ぼうき作りの副業をなす農家の多かった下内間木では、農閑期にそれらの副業から土建関係の日雇いへと変えたが、稲作はこれまでどおり維持する事ができた。したがって、下内間木は農業的な色彩が強く残り、都市化の遅れた地域となった。

しかし、同じ稲作地域でも“竹屋”と半農半商の農家をもつ上内間木では経営耕地規模も小さく、したがって農家は採算のとれない農業経営を切り捨て、地価の安い低湿地帯に適する貸工場・貸倉庫業を始めた。したがって上内間木は市街化はおくれているが、零細企業の工場が多く、地域内には、休耕地の増大がめだつ。

これらの結果より農村の内部の条件が現在の地域における都市化現象を大きく性格づけている事がわかった。

福島県夏井川流域の地理学的考察

松 崎 正 子

夏井川は福島県の南東に位置し、県域で太平洋へ流入する河川としては最大の流域面積を有している。本論文は夏井川流域でも、その中で最大の市街地であり、かついわき市の中心地である平を主として取り上げ、自然環境を重視しつつ地誌的にまとめた。

いわきはNW-S Eの走向をもつ多数の断層群により第三紀層が阿武隅山中まで深く入り込んでいるため、福島県の狭小な海岸地帯の中では比較的海拔高度の低い地帯が広く拡がっている。この様に四方を山地と海で囲まれた「いわき」は古来一つの閉鎖的な地域社会をなして来た。そして現在でもそれは同じである。いわきの中では断層地形から北部・南部と二つの地塊に分けられるが、夏井川流域はその北半を占める地塊全域とほぼ一致しており、これは平影響圏、特に平商圈の領域を大きく規定している。夏井川水系は阿武隅山中に発し、山中では断層の影響を受けて、本流や支流好間川はNW-S Eの方向に流れているが、東縁においては著しい先行性流路を呈し、東縁の山麓斜面から現出してくる石城夾炭層帯では河岸段丘が発達しており、なかでも好間川・新川沿いの河岸段丘では明治末から炭鉱の開設に伴い多数の炭鉱集落の立地をみた。夏井川沿いの河岸段丘では、水はけの良好な土地条件から、梨栽培が盛んである。支流好間川や新川は平市街地付近にて本流と合流している。このため主要道路は平を中心に放射状に延びている。この合流付近は平が城下町として発達する上で核となった城跡を残す残丘状の中位段丘を中心に広い平坦面をなしており、平中心市街地は中位段丘